

高尾山報

令和7年10月号



高尾山中興開山六百五十年記念京都巡拝

於・醍醐寺金堂

秋彼岸先師墓地参り

九月二十三日(火)



佐藤貫首は真言宗智山派の宗務運営に関する協議を行うため、総本山智積院において開催された宗機顧問会に出席致しました。

当日は、午後一時に智積院に登壇され、多くの僧侶による出迎えを受けられた後、会場である宸殿へと移動し、午後二時より宗機顧問会に臨みました。

当山貫首宗機顧問会出席

九月九日(火)



節の移り変わりと、都から半年にも及んだ長旅を成し得た感動が詠われているようにです。

西行は、百数十年前に白河関を訪れていた能因に思いを馳せていました。僧侶でありながら和歌の道を追い求めた能因に、西行は強く心惹かれていたのだでしょう。自分も同じ場所に立つことができたという喜びが伝わってくるようです。

ちなみに、この能因の「都をば」の歌をめぐっては面白い逸話が伝わっています。

能因法師は、これ以上ないほどの「数寄者」(風流を好む人)でした。

「都をば」という歌を、都に住んでいながら見せるのは惜しいと思つて、誰にも知られないように家に引きこもると、太陽の日に当たりながら長い夏を過ごしたのです。

そして秋を迎えて身体を色黒にした後に「陸奥の方へ修行に出かけた」ときに詠んだものです」と

白河関は陸奥への玄関口として重要な役割を担っていました。都人にとつて、陸奥は憧れの土地でもありました。西行の「白川の」の歌では、「もる」に「漏る」と「守る」とが掛けられています。これまで旅を共にしてきた月の光が、白河関では関を守る番人のように映っていたのでしょうか。白河関を通ってきた昔人と同様に、西行もまた未知なる場所を前にして気持ちを新たにしているようです。

この「白川の」の歌の詞書には、平安時代中期の歌僧、能因(九八八?)の和歌が引用されています。

言つて、人々に歌を披露したそうです。

〔十訓抄〕(なご)この話では、能因は東国に下向していません。歌の真実味を持たせるために日焼けを試みる姿は滑稽にも感じますが、本人にとつては至つて真面目な問題だったのでしょう。

ここで能因は「いたれる数寄者」と語られています。また、「数寄」は、和歌や絵画、音楽や茶道などの「風雅の道に深く寄せる心」を意味します。日頃から芸術の高みを目指していたからこそ、寸分の妥協も許さなかったのかもかもしれません。そうした純粋に芸道を追い求めた数寄者の姿は、取りも直さず一途に仏道修行に明け暮れる僧侶としての心とも矛盾することなく、重なり合っていたのではなかつたか考えます。

江戸時代中期の俳人、服部土芳(一六五七〜一七三〇)の『三冊子』(「白冊子」)には、能因の「都をば」とともに次のように

(栃木北部教区普濟寺)

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(160)

「暑さ寒さも彼岸まで」。お彼岸を迎えて紅白の彼岸花が咲き揃っています。いつしか松虫や鈴虫などの虫の音も賑やかに重なり合つて、それは「虫時雨」という言い回しがあるように、涼やかな秋の訪れを告げているかのようです。

秋の夜長の夜空にも、秋の風情が漂っているでしょう。

澄みのぼる
心や空を
松ふらん
雲の塵るぬ
秋の夜の月
〔金葉集〕源俊賴

(澄みのぼつていく心が、空を払い清めているのだろうか。雲一つない秋の夜の月よ)

一雨ごとに大気中の塵が洗い流されて、月影も美しい折節となりました。

今年の十五夜は十月六日、後の月と呼ばれる十三夜は十一月二日です。心地よい青空に外の面に出れば、皎々と照り輝く満月を独り占めできるのでしょうか。仏教では、心に付いた汚れを「心の塵」と言いますが、澄みわたつた月光に照らされたなら、いつしか心の雑念(煩悩)も消え去っているかもしれません。

秋の「月見」や「虫聞き」は、春の「花見」や秋の「菊見」、冬の「雪見」とともに五つの風流と呼ばれるそうです。これから秋が深まれば「紅葉見」(紅葉狩)もあるでしょう。また菊には「星見草」という異名もあります。四季折々の彩りを愛でながら、身近な美しさを感じる事ができればと思います。

時には月の光に誘われるように、秋の旅路に出かけてみるのはいかがでしょう。

白川の
関屋を月の
漏る影は
人の心を
留むるなりけり
(西行「山家集」)

「白河の関の関屋に漏れる月の光は、この場所を通り過ぎた古人と同じように、私の心をも引き留めるよ」

この歌は、平安時代末期の歌僧、西行法師(一一一八〜一二〇六)が「白河関」(福島県白河市旗宿)で詠んだものです。

白河関は、念珠関(山形県鶴岡市鼠ヶ関)、勿来関(福島県いわき市勿来)とともに「奥州三関」(奥羽三関)として知られ、都と陸奥(現在の東北地方)とを結ぶ在の東北地方)とを結ぶ「東山道」の要所に置かれた関所です。日本の山間部を抜ける総距離二〇〇キロメートルにも及ぶ東山道の中にあつて

白河関は陸奥への玄関口として重要な役割を担っていました。都人にとつて、陸奥は憧れの土地でもありました。西行の「白川の」の歌では、「もる」に「漏る」と「守る」とが掛けられています。これまで旅を共にしてきた月の光が、白河関では関を守る番人のように映っていたのでしょうか。白河関を通ってきた昔人と同様に、西行もまた未知なる場所を前にして気持ちを新たにしているようです。

この「白川の」の歌の詞書には、平安時代中期の歌僧、能因(九八八?)の和歌が引用されています。

言つて、人々に歌を披露したそうです。

〔十訓抄〕(なご)この話では、能因は東国に下向していません。歌の真実味を持たせるために日焼けを試みる姿は滑稽にも感じますが、本人にとつては至つて真面目な問題だったのでしょう。

ここで能因は「いたれる数寄者」と語られています。また、「数寄」は、和歌や絵画、音楽や茶道などの「風雅の道に深く寄せる心」を意味します。日頃から芸術の高みを目指していたからこそ、寸分の妥協も許さなかったのかもかもしれません。そうした純粋に芸道を追い求めた数寄者の姿は、取りも直さず一途に仏道修行に明け暮れる僧侶としての心とも矛盾することなく、重なり合っていたのではなかつたか考えます。

江戸時代中期の俳人、服部土芳(一六五七〜一七三〇)の『三冊子』(「白冊子」)には、能因の「都をば」とともに次のように

(栃木北部教区普濟寺)



彼岸花が艶やかに咲く



お加持を授かる
交通少年団



両交通安全協会の出迎えを受け
入場する山伏



南大沢交通安全協会の篠崎和行会長(左)
八王子交通安全協会の飯沢宗光会長



人々の願いが込められた撫木を
火中に投ずる



交通安全や諸願成就を祈って佐藤貫首が勇壮に火を渡る

八王子・南大沢交通安全協会主催
交通安全祈願火渡り祭厳修
於・高尾山自動車祈祷殿大広場(九月十三日(土))



高尾交通安全協会の皆様と共に交通安全と無事故の世を祈る



交差点での安全を祈って山伏がお祓い



高尾交通安全協会の田中伸治会長



無事にすごせますように…



交通安全を願い撫木を投入する

高尾交通安全協会主催
交通安全祈願火のまつり厳修
於・高尾山自動車祈祷殿大広場(九月六日(土))

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

70

二十世岳純5 『八王子名勝志』その1

弘化四年（一八四七）、飯縄権現社上棟にともの儀式を執り行うにあたり、大工の棟梁小町金義に対して、神職の衣装を着用する許状が発給されている。この年の社殿再建がわかり、小町和義氏は文化二三年（一八一六）の大風雨による損傷を理由として推測しているが、南面する拝殿は確かに頻繁な修築を必要としたであろう。その落成後の威容を挿絵として収録しているのが、『八王子名勝志』という地誌である。

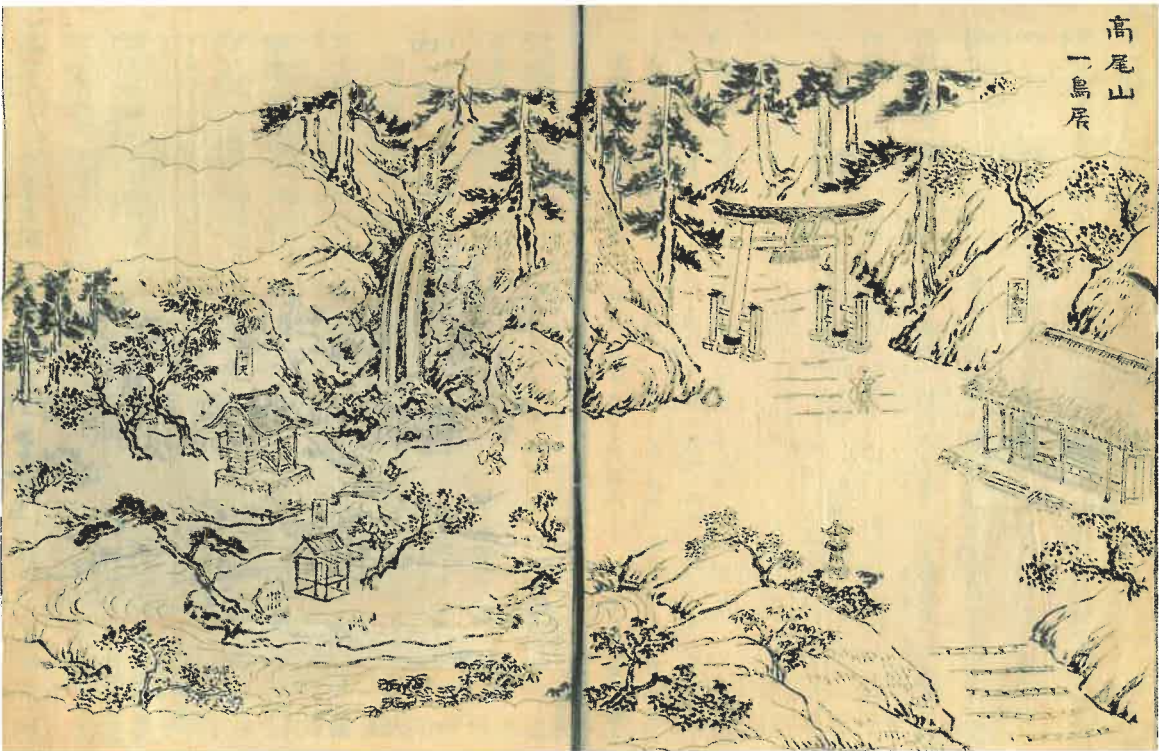
『八王子名勝志』

同書は百枝翁なる人物によつて八王子宿周辺の地誌としてまとめられた書物だが、高尾山関係の記事を収録した第四巻が

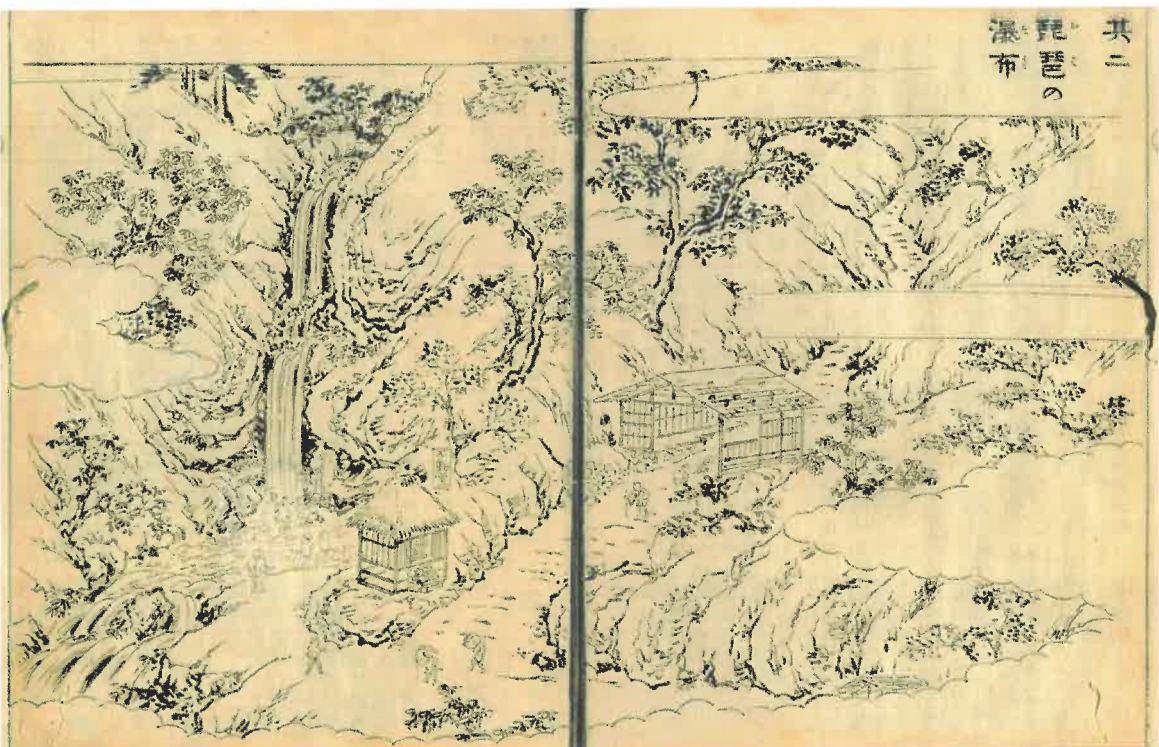
先に成立（嘉永二年・一八四九）していることなどから、加藤典子氏は高尾山の参詣記として構想されたと考察している。文政期における一連の地誌・紀行文に次ぎ、山内の詳細が判明する同書から、従前にはない記事の拾いつつ、特にその挿絵の詳細なことから大きめの図版として掲載してみたい。

なお、同書は八王子宿から高尾山に至る、挿絵をともの第三巻の後半部分と、第四巻の前半部分に構成の近似した高尾山の記事が二度重複して掲載される変則的な構成となっており、後者は前者の草稿と推測されている。今号では成立の早い第四巻の文章を引用することにする。

記事の冒頭には、概観の一文があり、「松杉鬱々として清風を宿し、巖石峩々として輕雲を被れ」る靈山としては「東都をあい去ることわずかに十有三里。駿馬に一鞭を加うる時は往還容易なり」とする。江戸から近い靈山という点は、今日の東京都心から至近というニュアンスと同様である。「高き峰の尾長く続けるを以て」と「高尾」の山号の由来を記す。行基による薬師如来祭祀と俊源中興の縁起を述べ、山の「曲木」、道の「怪石」、琵琶滝、独鈷の井戸、仏法僧と鹿の生息などを挙げる。そして「頭密白足戒行青眼の僧侶は霜の夜、雪の朝に崇祠を務め太平を祈り」「三



清滝周辺の景観
（『八王子名勝志』 国立国会図書館デジタルコレクションから）



琵琶滝
（『八王子名勝志』 国立国会図書館デジタルコレクションから）

密瑜伽の行業は座臥共に修する事年久し」「信心の貴賤は一切願望を円満する事、豈に薬王の妙応有喜の芳縁と言わざらむや」と格調高く結んでいる。

一之鳥居周辺

山内の案内は一之鳥居・不動院から始まり、次いで琵琶滝が続く。不動院は梁六間・桁四間の方形の建物で寶頭盧尊者を安置するとある。不動院には少し前まで、自らの患部と同じ箇所をなでると治癒の利益があるとすると、お寶頭盧様の像が安置されていた。挿絵は清滝前の弁天池周辺の様子が詳細である。今は無い一之鳥居は控え柱の付いた六本足で、京王

高尾山口駅北側にある氷川神社の鳥居を彷彿とさせる。「天神」の社の脇には連載三八回に紹介した、現存する清滝開創の碑が見える。清滝は水路によつて水を引いた人造の滝であるが、豊富な水勢が描かれている。

琵琶滝

記事が鳥居の先に進まず琵琶滝へ続くのは、以前に取り上げた紀行文『高尾山石老山記』の作者竹村立義が西方に少し離れた琵琶滝を先に詣でた後、表参道（二号路）を登った行程に順を同じくする。琵琶滝への道を進むと二軒茶屋があり、滝垢離する者が滞在する記述は竹村の紀行文にもあった。半助という者が不動尊の御影や滝の図を出すというのは、琵琶滝がポピュラーな参詣スポットだったことを示している。滝の傍らに不動堂と参籠堂があるのは現在と同じだが、挿絵に見える建物は今日とは異なる。

『八王子名勝志』の特徴は、従来の地誌・紀行文にはない修辭である。絶巖に沿うて下ること二丈有余…素雪玉を砕き白虹日に映じて、蒼樹陰鬱の間に漲り落ち、下流藍を湛え碧を引き、巨石巖の側にめぐり行き、千嵐扇て毛骨夏も寒く、百雷打って声音時に聞こゆる。と格調高い。滝壺には弘法大師空海が刻み百日滝に籠って加持をしたという「梵字石」があるとす。高尾山と宗祖空海を結びつける伝承が、水にまつる靈地にある点は印象深い。

《参考文献》小町和義「高尾山の建築について」（『多摩文化第二四号武州高尾山―その自然と歴史』九七四、加藤典子「解題」（『八王子名勝志二』八王子市教育委員会、二〇一五）

おことわり 本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。



醍醐寺三宝院より庭園を望む



真言宗総本山東寺を散策



智積院にて庭園をご案内頂く



狸谷山大本堂（左）内で御詠歌を奉詠しました



高尾山中興開山六百五十年記念

九月十七日(水)～十九日(金)

京都巡拝成満

本年は、永和年間に京都醍醐寺より入山された俊源大徳による薬王院中興開山から、六百五十年という大きな節目の年を迎えております。この縁を記念し、当山貫首佐藤秀仁僧正発願のもと、九月十七日から十九日にかけて京都巡拝を挙行致しました。

巡拝には佐藤貫首をはじめとした先達衆、秀峰会、高尾山慶賛会、そして一般の御信徒の皆様が御参加下さいました。

初日は真言宗総本山東寺、真言宗智山派総本山智積院を参拝し、智積院では僧侶より境内案内を頂きました。

二日目には高尾山慶賛会の皆様が発流して、登拝組と拝観組に分かれて真言宗醍醐派総本山醍醐寺を巡拝致しました。

登拝組は佐藤貫首大先達とともに上醍醐の開山堂まで登拝修行をし、拝観組は醍醐寺僧侶のご案内のもと境内を拝観いたしました。その後合流し、醍醐寺第百四世座主壁瀬猊下直々の大祇師を仰ぎ柴燈大護摩供が厳修され、共に祈りを捧げることができました。

最終日は、高尾山と修験道の御縁が深い真言宗修験道大本山狸谷山不動院を参拝し、松田貫主大導師による御護摩修行に参列し本堂内で御詠歌を奉詠、さらに貴重な法話を拝聴致しました。

三日間を通じて、共に巡拝し祈りを捧げる中で、俊源大徳のご加護と深いご縁を改めて実感する巡拝となりました。



壁瀬猊下大祇師のもと柴燈大護摩供が行われた



開山堂にて



佐藤貫首と共に上醍醐の開山堂まで登拝修行を行う一行

観音菩薩の宗教

94

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音(その32)―仏教の性別観

部派仏教において比丘尼の比丘に対する従属的地位が制度化されたのに対し、大乘仏教においては本来のブツダが説いた男女平等の思想が復活した。その哲学的根拠は、諸法是因縁所生とする空の哲学である(前号参照)。諸法に性別を当てはめれば、生物学的な男も女も、今日的なジェンダーも固定的・本質的なものではなく、因縁や過去の業によつて生じるものとされる。固定的・本質的ではないとは、自性(svabhāva)がない、すなわち無自性(asva bhava)ということである。それによれば、男女の違いは環境や条件によつて生じるから、俗に表現すれば、自分や神の意思とは別にたまたまそうなっただけといえる。この思想は、アダムとイヴが神(Yahweh)によつて創造されたとし、性を固定的に考えるユダヤ・キリスト教と根本的に相違するものである(拙稿「観音菩薩の宗教」⁹⁰⁾。このことがキリスト教社会において女性解放運動を惹起したこともすでに述べた(同⁸⁹⁾。

大乘経典には性の応変性・流動性が比喩的・説話的に説かれている。その例として先ず『維摩経』を取り上げたい。『維摩経』は『般若経』に続き、『法華経』に先立つことインドで成立した初期大乘経典で、七度に互り漢訳されたとき、このうち三訳が伝存する。なか



絹本墨画維摩居士像。宋(13世紀)。京都国立博物館蔵。『維摩経』の主人公の維摩と「観衆生品」に登場する天女が立つ。
<https://knmdb.kyohaku.go.jp/828.html>

経」岩波書店、二〇二一年)。このうち和訳の部分と訳注が取り出されて文庫化され出版されている(植木雅俊『サンスクリット版全訳現代語訳維摩経』角川ソフィア文庫、二〇一九年)。

『維摩経』は空の哲学に基づき、保守派仏教徒により権威主義的になった教団を在家者の維摩(ヴィマラキールティ; malakirti)が批判、出家者の仏弟子たちを論破するとともに、あらゆること(諸法)が無根拠でどこにも依拠しないことを説く。ここにいう「無根拠」の原語は apratiśha de、鳩摩羅什は「無住」と漢訳している(大正大

蔵経14巻、五四七頁三段)。すなわち空の哲学である。

筆者はかつて『般若心経』が視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚を空とすること(無色声香味触)を「感覚は絶対的なものではなく」、「その対象の世界もまた根拠がなく、知覚されたままの世界とは限らない」と説明した(『文学・美術に見る仏教の生死観』NHK出版、二〇二二年、三二頁)。また、筆者が海外の留学生たちに英語で空の哲学を講じる際、感覚器官やそれにより感じられた世界は groundlessness すなわち「根拠がないこと」と解説する。『般若心経』で

はすべてのものごとが「根拠のないこと」を五蘊皆空とし、『維摩経』は無住といったのである。

『維摩経』では、維摩と出家者の文殊(Maitreya)が大乘の思想について問答した後、同じく出家者の舍利弗(玄奘訳では舍利子。原語はシャリープトラ Śariputra)と天女(Devatā)が登場させ、男女の性別も固定的なものではないことを説いていく。『維摩経』はしばしば戯曲形式といわれるように、その所説は天女と舍利弗の視覚的にも劇的なやりとりにより描かれている。

「小乗仏教の女性蔑視に凝り固まったシャリープトラ」(植木、前掲書、文庫版、二四八頁)は、女性の姿をしている天女に向かつて「天女よ、あなたはどのようにして女であること(sūti-bhava)を転じ[て男の身を示さ]ないのか?」(植木、岩波版、三〇九頁以降。文庫版、二三五頁以降。以下、同)

と問う(カッコ内の原語は植木氏の岩波版より引き、筆者が補ったもの)。蓋し、この問いは天女に対してかなり失礼なものである。女性に向かつて、言わずもがなの「なぜあなたは価値もなく、さとりも開けぬ女性のままでいるのか」と言ったも同然だからである。映画『男はつらいよ』の寅さんであれば、「それを言っちゃあおしまいよ」であるし、その言い草は現代のコンプライアンスにも大きく抵触しよう。

しかし天女はまったく動じる様子がなく、「あらゆるものごとは化作されたもの(nirmita)」とする空の哲学を述べた後、神通力(adhisṭhāna)によりシャリープトラを天女の姿(Devatā-rūpa)に変え、天女自身はシャリープトラの姿に変身してしまう。つまり天女は両者の姿と性別を入れ替えてしまうのである。自らの神通でシャリープトラの姿になった天

女は、今度は逆に同じ質問をシャリープトラに返して言う。「尊者シャリープトラよ、[あなたは]どうして女であることを転じ[て男の身を示さ]ないのですか」。意思に反して天女の姿にされたシャリープトラは動揺して、「どのように元に戻すのか、[どうして]男の姿(puṇṣa-rūpa)が消滅し、私に女の姿(sūti-rūpa)が生じたのか、私にはわからない」と返答する。これに対し天女は、釈尊の言葉を引いて「世尊は『あらゆるものごと(一切法 sarva-dharma)は、女でもなく(na sūti)、男でもないのだ(na puṇṣa)』と言われました」と述べたのち、神通を解いて二人を元の姿に戻した。

さらに天女は、「尊者シャリープトラよ、あなたが得ていた女の姿は今、[いつたい]どこへ行ったのでしょうか」と尋ねた。天女との対話で無住の真実に気付いたシャリー

プトラは答えて言った。「その[女の姿]は作られたのでもなく、作り変えられたものでもないのだ」。天女はこれを是としたうえで、男女の相違を固定的なものとして囚われることの非を以下のように述べる。「まさにそのように、あらゆるものごととは(sarva-dharma)作られたものでもなく、作り変えられたものでもありません。そこには、作られることもなく、作り変えられることもありません。それが、ブツダの言葉なのです」

以上の場面はサンスクリット語版の第六章「天女の章(Devatā-parivartana)」に記されているが、漢訳では鳩摩羅什訳「観衆生品」とあり天女の語が見えない。これについて植木は「男尊女卑の著しい儒教倫理の中国社

会を考慮して、男性出家者のシャリープトラをやりこめる『天女』を章の名前からはずした訳にしたのであろうか」(植木、二〇二一年、三六頁。植木、文庫版、二四五頁)と推定している。それが事実とすれば、『維摩経』の所説がいかに強く「男尊女卑」を否定し、男女平等を主張したかが窺知できよう。

自分の意思に反して姿が変わる「物語」は、藤子・F・不二雄の「おれ、夕子」(『藤子不二雄ランド』通巻239巻、中央公論社、1989年他。アニメ版・実写版あり)や、カフカの『変身』を想起させる。しかし前者は科学者の父親が失った娘のDNAを男子に注入して娘の姿を蘇らせる話で、後者は主人公が毒虫に変わった意味は明示されず、「不条理」などと解釈されている。いずれも『維摩経』とは思想的背景が異なる。

さらに多面的に大乘仏教の男女観を考察するため、今回は『法華経』「提婆達多品」の所説を見ることにする。

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安している仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

高尾山仏舎利塔 結縁牌懸仏のおすすめ



尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。
(左の写真)



御納仏冥加料
一体 拾万円也



結縁牌懸仏新規奉納者御芳名

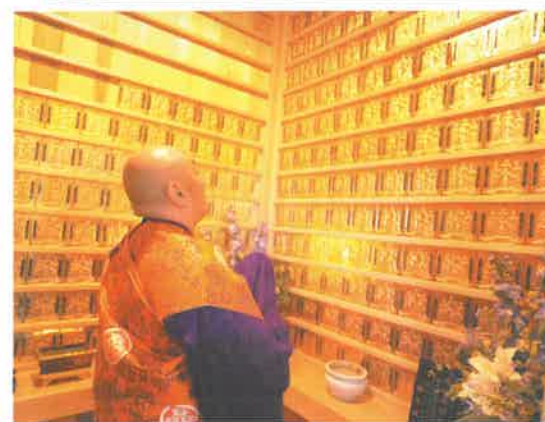
品川区	川崎市	港北区	町田市
中村	金子	張	浅沼
嘉子	春恵	和正	みどり
	三鷹市	相模原市	船橋市
(順不同・敬称略)	奥野	大野	小淵
	里米	徹	修二

お釈迦様との御縁を深める 仏舎利塔奉安懸仏総供養法要厳修

九月四日(木)



佐藤貫首による酒水加持



懸仏を懸ろに供養する



法要に先立ち法話が行われた



仏舎利塔内を参拝する奉納者一同

川上にすんでいたカッパは、日がな一日川面を漂っては、ときおり村人からかつさらったキュウリをうまさうにはおぼつていた。

村人が川岸の決壊を防ぐため、力を合わせて堤の工事をしているもどき吹く風。「まったくご苦労なこった。その点おいらは気楽」と、プカプカ浮かびながら口笛を吹いていた。

今年は雨の多い秋だ。空が黒雲におおわれると、たちまちたたきつけるような雨に変わる。濡れるのがへっちゃらなカッパは、一目散に逃げ帰る人間たちを見て笑っていた。

ところが、昨晩から振りだした雨は翌日の昼を過ぎても一向に止む気配はなかった。「もつと降れー、もつと降れー」と、

川下のカッパ

八王子市 池田美絵

悪乗りしていたカッパだったが、水量は増し、うねりはいつそう激しくなってくる。カッパは心配に激しくもまれ、上下左右に回転しながら川下に向かって流されていった。

「どれぐらい時間がたつただろうか、カッパは体が軽くなるのを感じて水面に顔を出し、プハッと水を吐いた。漁師がしかけていた網にひっかかったのである。

「ほー、助かったぜ」と一息つくと、右手に持っていたキュウリをひとかじり。意地汚いカッパはキュウリだけは離さずにつけていた。「ん？ 塩味がつ

いたきゅうりもなかなかうまいね」と強がった。

「おーい、そこのお方。大丈夫ですかーい？」。遠くから男の声が聞こえた。カッパはきゅうりを持った手を振って、「キュキュキュ」と声を出した。自分では「だいじょうぶだー」と言っていたつもりだったが、男にはこう聞こえた。

「なんだ、カッパか」。心配をして損をしたというような言い草だった。その男は、河口の漁師だった。

「しかし、この雨でよく無事だったなあ。漁師の男は岸からカッパを見下ろして感心している。そしてしばらく腕組みをして思案するようなそぶりをするとパンと手をたたいた。

「お前さん、泳ぎの得意なところで沖の網を取ってきてくれないかなあ。礼は弾むから」。

カッパは礼と聞いて、簡単に引き上げた。そのころには水面は穏やかに



なってきたから、カッパはいとも簡単に網を丸めるとスイスイと岸まで泳いできた。

「さすがだね。恩にきるぜ」。漁師の男は、河口でとれるハゼやカワハギ、ヒラメでカッパをもてなした。海の産物が初めてだったカッパは喉を鳴らして食らいついた。

そのあとも、カッパは男に頼まれるまま網の回収や船底の修繕を手伝った。川上にいたときはじゃけんにされていたが、ここでは喜ばれ、御馳走まていただけ。まことにいい気分だった。

そうしてひと月が過ぎた。

(挿し絵・小出 茂)

智山専修学院生 来山される

九月四日(木)

真言宗智山派の僧侶育成機関である、智山専修学院より、十八名の修行僧と引率の本山僧侶二名の総勢二十名が、残暑色濃い高尾山を訪れました。

一行は関東三大本山巡りの一環として、成田山新勝寺・川崎大師平間寺を参拝の後、高尾山の宿坊に参籠。翌朝の大護摩供修行に参列して、修行満足と学業成就を御祈念されました。



聖天堂開扉法要

九月十三日(土)～十四日(日)



九月中旬、秋風が吹き始める頃、聖天堂にて開扉法要が厳かに執り行われました。このお堂には薬王院の御本尊・飯縄大権現様の五相合体の御姿の一つ、大聖歡喜天(和合歡喜天)様がお祀りされています。

一年のうち、御信徒様が堂内を拝観して参拝できるのはわずか二日間のみです。当日は佐藤貫首をはじめ、山内の僧侶が整列し、一心に祈りを捧げました。

秋遊教王護国寺

十八本山参詣(3)

不断朝拜開祖庵
東寺常満信徒参
金堂講堂満國寶
同行二人千年探

秋、教王護国寺に遊ぶ

毎朝の御影堂(空海様のご住坊)の参拝者は絶え間なく、東寺の境内は常にお参りする信徒でごった返す。金堂・講堂は多くの国宝に満ち、『同行二人』の歴史探訪は一千二百年にも及ぶ。



佐藤貫首が高尾警察署講堂において「霊気満山高尾山」人として生きて行く心構え」と題し講演を行いました。

講演の最後には、日頃より地域の安全と安心を守るためにご尽力頂いている警察官の皆様への献身的な活動に敬意と感謝の意を表すると共に、今後一層のご健勝とご活躍を祈念されました。

高尾警察署特別講演

九月五日(金)



高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。
御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様への祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。
御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。
大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。

御護摩修行のすすめ
皆様の諸願成就を祈願する

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納する習慣があります。
今日でも、お杉苗木奉納は続いており、参道の杉原には、杉苗木奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。
高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ること厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ共存共栄し、今日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年十二月十日までに、一万円以上を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

高尾山薬王院の御護摩札

交通安全
(ステッカー)
(車内用札)

※お供物はつきません

市5.5×長12.5cm

お護摩 3,000円以上

市8.0×長35.5cm

お護摩 5,000円以上

市8.5×長37.7cm

お護摩 10,000円以上

市11.5×長42.3cm

特別大護摩 30,000円以上

市12.0×長48.5cm

開帳大護摩 50,000円以上

市12.0×長54.5cm

特別開帳大護摩 100,000円以上

市14.3×長60.5cm

奉納杉苗(杉)

御札(札)

心願成就(心)

入学成就(入)

安産成就(安)

良縁成就(縁)

開運(開)

当病平癒(病)

身体健全(体)

厄除(厄)

災難消除(災)

身上安全(身)

交通安全(不交)

神棚用木札

交通安全(車交)

車内用札(車交)

事業繁栄(事)

商業繁昌(商)

家内安全(家)

(一)内の略体をお書き下さい

お願い事は、一体一願意とします。

併願(二)願意は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商業繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

星まつり祈禱のすすめ

星まつりとは、毎年順を追って巡りくる九星にお祈りして、災厄を除き福運を招く祈禱です。

高尾山では、冬至に星まつり特別大護摩供を厳修して、御信徒各位の諸願成就を祈念しております。



又、当山の星まつりの御札は飯繩大権現、薬師如来、不動明王の三尊を始め、殊に九星、十二宮、二十八宿等の諸々の曜星を網羅した星曼陀羅を内符として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、広大無辺のご加護に浴せられますようお願い致します。
※年齢は来年の数え年(来年の満年齢に一歳加える)ご祈禱料は一人様千円。特別祈禱料は二千円以上となります。申し込み締め切りは十二月八日、冬至の祈禱終了後、お札を郵送致します。
祈禱申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾山の御寶曆、振込用紙一式をお送り致します。

凶運	半吉運	大吉運	凶運	大吉運	半吉運	大吉運	半吉運	凶運
羅喉星	土曜星	水曜星	金曜星	日曜星	火曜星	計都星	月曜星	木曜星
此の星に当る人は運勢漸く難あり家内他人に口舌多しな病難に注意を要す信心堅固にして慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く開く象にして諸事準備なさば花綻ぶが如くなれど怠らば災害事あり	此の星に当る人は幸運の象にして善業積めば目上の引立亦意外な利得あり口舌傷害などに注意すべし	此の星に当る人は運勢漸くの象にして黒き雲の為に清き月の光も隠るゝ如く何かと障りあり口舌争論傷害等用心すべし	此の星に当る人は盛運にして万事順調に運ぶ像なれども慢心すれば大吉反て凶となる信心して加護を得べし	此の星に当る人は疲勞困憊の象にして災厄病難等に注意すべし信心して堅忍自重を要す	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多く損失離れば除災光を得る	此の星に当る人は進展の象なれど過ぎたるはなお及ばざるが如しにして余り過ぎるは災いの基である信心怠らず精進すべし	此の星に当る人は除災招福の象にして万事都合に運ぶなれど細心の注意を欠くと損失あり目上目下の意見を聞き性急を慎むべし
九紫	八白	七赤	六白	五黄	四緑	三碧	二黒	一白
平成30年生	平成31年/令和元年生	令和2年生	令和3年生	令和4年生	令和5年生	令和6年生	令和7年生	令和8年生
9	8	7	6	5	4	3	2	1
平成21年生	平成22年生	平成23年生	平成24年生	平成25年生	平成26年生	平成27年生	平成28年生	平成29年生
18	17	16	15	14	13	12	11	10
平成12年生	平成13年生	平成14年生	平成15年生	平成16年生	平成17年生	平成18年生	平成19年生	平成20年生
27	26	25	24	23	22	21	20	19
平成3年生	平成4年生	平成5年生	平成6年生	平成7年生	平成8年生	平成9年生	平成10年生	平成11年生
36	35	34	33	32	31	30	29	28
昭和57年生	昭和58年生	昭和59年生	昭和60年生	昭和61年生	昭和62年生	昭和63年生	昭和64年/平成元年生	平成2年生
45	44	43	42	41	40	39	38	37
昭和48年生	昭和49年生	昭和50年生	昭和51年生	昭和52年生	昭和53年生	昭和54年生	昭和55年生	昭和56年生
54	53	52	51	50	49	48	47	46
昭和39年生	昭和40年生	昭和41年生	昭和42年生	昭和43年生	昭和44年生	昭和45年生	昭和46年生	昭和47年生
63	62	61	60	59	58	57	56	55
昭和30年生	昭和31年生	昭和32年生	昭和33年生	昭和34年生	昭和35年生	昭和36年生	昭和37年生	昭和38年生
72	71	70	69	68	67	66	65	64
昭和21年生	昭和22年生	昭和23年生	昭和24年生	昭和25年生	昭和26年生	昭和27年生	昭和28年生	昭和29年生
81	80	79	78	77	76	75	74	73
昭和12年生	昭和13年生	昭和14年生	昭和15年生	昭和16年生	昭和17年生	昭和18年生	昭和19年生	昭和20年生
90	89	88	87	86	85	84	83	82
昭和3年生	昭和4年生	昭和5年生	昭和6年生	昭和7年生	昭和8年生	昭和9年生	昭和10年生	昭和11年生
99	98	97	96	95	94	93	92	91
大正8年生	大正9年生	大正10年生	大正11年生	大正12年生	大正13年生	大正14年生	大正15年生/昭和元年生	昭和2年生
108	107	106	105	104	103	102	101	100



花材：ツルウメモドキ・シマフトイ・千日紅

秋のお彼岸を過ぎた途端、空気が一気に秋めいてきました。
「実りの秋」とも言われますが、今回は実物の花材をふんだんに用いた作品をご紹介します。花形は生花新風体です。生花新風体では、作者が感動を受け、見せたいと感じた花材をメイン

に据え、自由に用いることができます。
今年は実物の出来が良く、ツルウメモドキの実も張りがあり、鮮やかに育っています。今回の作品ではそのツルウメモドキを多く取り入れ、見どころとしました。
ツルウメモドキは名前のとおりツル性で垂れる性

質を持つため、従来は下に置いた花器から立ち上げて生けることは禁じられています。けれども、勢いよく伸びる枝にも魅力を感じ、その姿を生かしてみたい。さらに、夏の名残を表す水辺の植物・シマフトイを、黄変したものを交えて挿すことで、立ち上る雰囲気と秋の風情を一層際立たせています。
花器は前回と同様ガラス製ですが、黒い柄を選ぶことで、ツルウメモドキの色をいっそう鮮明に引き立てました。

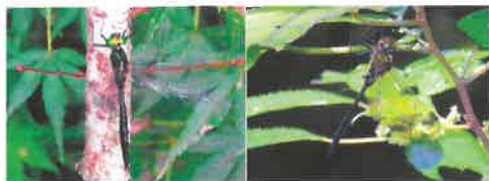
いけばなの心 ⑥7

華道教授 佐藤 宗明

高尾山の昆虫

タカネトンボ

192



高尾山で人気のミヤマクワガタ（深山鋏形）は、名前こそ高山地に産する種のように聞こえますが、実際は少ないながら平地でも生息します。タカネトンボ（高嶺蜻蛉）も同様で、高標高地限定のトンボでは決してありません。
大きき的には五十〜六十mmくらいでシオカラトンボ程度ですが、細身で小型のヤンマを思わせるようなフォルムで風情があります。エゾトンボの仲間で、複眼は鮮やかな金緑に赤が混ざるトロピカルな輝きがあり、腹部は虎模様の縞が入り、胸部や腰の辺りも強い緑の金属光沢があり実に綺麗です。
六月頃から発生し、十月一杯まで見られます。小型ながらルリボシヤンマやオオルリボシヤンマと混生することがあり、色彩的なインパクトでは引けをとりません。
トンボやヤンマの仲間はよく番になって飛行し、オスがメスの首を挟んで支えて共同して産卵行動をする光景が見かけられます。本種はそれに当てはまらず、メスが単独で産卵することが知られていて、その美しい容姿とはまた違う孤高の存在なのかも知れません。

（文松島 孝 撮影上村 雅昭）

高尾山 季節散歩

和風月名

小春月

「こはるづき」

「小春日和」とは旧暦十月、つまり秋の終わりに初冬にかけての頃に、春のように温かく穏やかな気候が現れることを指します。実際の季節は秋ですが、そのやわらかな日和を「小さな春」と見立てたことから「小春」と呼ばれるようになり、旧暦十月の別称ともなりました。

今月の風物詩

梨

梨は日本書紀や万葉集にも出てくるように、古代から食用にされてきました。秋の実りの代表的作物であり、水分が多く、シャリシャリとした食感が好まれています。近年では洋梨も人気を集めています。日本ではやはり和梨が秋の風物詩として親しまれています。

一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

四十五段 追い求めない人生を

人はお金や権力、名誉などを求めますが、執着しすぎれば失う不安からさらに欲を募らせ、心の安らぎを失います。お金は使うことで新たな価値や発見を生みます。欲をほどほどに抑え、充実した人生を送りたいものです。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約三百万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々に参加されており、期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと、健康登山者限定の記念品と交換できます。



帳面……………七百円
スタンプ………百円

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙

八王子市 南保 仁恵

「自由時間」

赤とんぼ園児は自由時間なり



「曼珠沙華（彼岸花）」





登山だより

十一月行事日程

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

八日、二十日

弁天秘供

四日、十七日

御詠歌勉強会

(十時山麓不動院)

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

二十二日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

二十八日

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

三十一日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

二十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権

現様の日々の御加護に感謝

し、沢山の御供物を捧げて

御本尊様威光倍增の為、御

供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し

出下さい。尚、法要終了後

に百味のお札を授与致し

ます。

毎月二十一日午前九時勤修

御志納金 一口三千円以上



毎日の お護摩奉修時間

午前9時30分

// 11時00分

午後0時30分

// 2時00分

// 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

七五三身上安全祈願



「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈禱」を受け付けております。どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

中興開山六百五十年記念法要

本年は、俊源大徳が高尾山を中興されました永和年間より数え、六百五十年という大きな節目の年を迎えております。この勝縁を記念し、本年の秋の大祭において「中興開山六百五十年記念法要」を厳修致します。御来山の折にはぜひ御本尊様とご縁をさらに深めて、心安らぐひと時をお過ごし頂ければ幸いに存じます。

また、本年末までの期間、大本堂では「特別御手元」を、御護摩受付所では「特別御朱印」をお授けしておりますので、どうぞこの機会に、尊いご縁をお結びくださいますようご案内申し上げます。

法要日時 十月十七日(金) 十二時半護摩

高尾山報助成金志納者
御芳名順不同・敬称略

西東京市 下田 トシ子

八王子市 吉田 喜平

小平市 関 道雄

新座市 彰山 粧麗

八王子市 佐藤 和久

〃 天 城

京都市 松本 恭俊

八王子市 山本 千枝子

〃 小川 沙輝

鹿沼市 松本 俊夫

武蔵野市 金子 満

相模原市 山崎 弘子

東大和市 中川 彰久

八王子市 佐戸 正幸

板橋区(街) 上信堂

高尾山健康登山者一同

高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

下記のQRコード
から高尾山薬王院
のホームページに
アクセスできます



発行所

東京都八王子市高尾町2177

大本山

高尾山薬王院

郵便番号 193-8686

電話(042)-661-1115(代)

FAX(042)-664-1199

発行人 犬山秀康

編集人 菅井倫浩

印刷 ヒラツカ印刷社

毎月1回1日発行

1部50円